
大阪・LOVEテンション

桜草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大阪・LOVEテンション

【Nコード】

N9693C

【作者名】

桜草

【あらすじ】

和葉への思いに気づきかけた平次。幼なじみでは恋は出来ないのかと考え込んでしまう和葉。事件に巻き込まれながらも、懸命に二人は近づいて行く。

ブローグ

「おい服部？聞いてるか？」

工藤が尋ねていた。

あわてて言い返す・・

「あつたりまえや！・・で何のことやつけ？」

「・・お前・・その年でもうボケが進んでんのか・・？」

「なんやとコラア！！！！・・そんなんちゃうぞ」

「じゃ、なんでだよ？」

聞き返されて言葉が詰まる。

「そつそれはそのやな・・」

前にマジックの事件があつたやろ？

あのときからずっと気になつとんねん・・

あいつのことがなあ・・

・・どうも事件に集中できへん・・

あいつの事が気になって・・

なーんかイライラしてくるつちゅーか・・

他の男と一緒にいると・・・むかむかしてきてしゃーないんねん・

何でだと思う？工藤・・・

「は？いやいやそつそれはだなあ・・・」

「それはなんや！」

「その・・・お前があ姉ちゃんの事を・・・子分だと思っているんじゃない・・・」

「まあそれはそうやるなあ、子分って感じじゃなかったし」

「・・・だろ？やっぱりお前・・・」

工藤はなぜか小声になるとそう付け足した。

「あの姉ちゃんのことが好きなんじゃねーか？」

はあっ？

何めろめろの恋愛小説と間違えとんねん・・・！

「あほ！おっ俺と和葉はただの幼なじみやぞ？！いっつも仲良しのお前らと同じにされーとーない！」

あれ？

何で熱くなってるんや俺は・・

「ばっばか！俺と蘭はそんな関係じゃねーぞ！！」

「ごまかすなや工藤・・なんで俺が和葉を好きにならんといけへんのや？あ？」

なんやろ・・顔がほてって・・

「ったく・・他人の気持ちにも鈍いだけじゃなく、自分の気持ちに鈍いんじゃないしょーがねーよな・・」

「どっどっという意味や？」

「別に・・それよりお前・・」

へ？

「顔真っ赤だぞ・・」

なっ？！

「あっあほ！！これはお前にじらされて怒ってる証拠やないか！！」

「・・へーそうなのか？」

からかい笑い顔で工藤は笑う
工藤・・・お前何考えとる？

俺をわざと怒らせてどうするつもりなんや？

「ならいいけど・・・ま、お前も女の子の心理について考えた方がよ
さそうだぜ？」

「おっお前は考えとるんか？」

「・・・ま、一応な・・・」

女の子の心理か・・・

和葉のこと、なんでもしつとると思うたけど・・・

ホンマはあんまりしらんよなあ・・・

心ん中は・・・

「ま、どーでもええけど・・・あの姉ちゃんと元に戻ってからつま
くいつとるんか？」

「はあ？ なっなんで蘭となんだよ？」

ほーんま分かりやすい奴や・・・
俺と比べてホンマ分かりやすうな

「・・・じゃあ今日はホンマにおおきに！またな」

「おっおう・・・。」

「あ、それと・・・」

なぜかその時頭が真っ白になって・・・

「あ・・・いや・・・なんでもない」

「そっそうか」

聞いてみたい気がした

でもきつと答えてくれないだろう・・・

自分で言おうとしたことは、大体見当がつく

なあ工藤・・・俺は和葉のこと・・・どう思ってるんやろ・・・

ただの幼なじみ？

そんなんちゃう・・・！もっと複雑なんや

いつからだろうなあ・・・こんな・・・

こんな・・・

こんな気持ちになったのって・・・

俺は・・・まさか・・・

和葉のこと・・・

プロローグ（後書き）

初めての小説で緊張してます！

評価を書いてくださる方、よろしく願います！

平次は自分の気持ちに気づくか？

次から第1話です。

FILE・1 幼なじみ

桜が舞い落ちる。

もう高校3年生かぁー。

「和葉ー!!」

友人が呼んでいる。振り返り笑顔をつくってみる。

「何してんの？」

「ああ桜見てたんやつ！きれいやなぁーと思って」

「せやな。あ！そうだ。クラス替え発表やけん、はよ見にいこ！」

うんと返事をしてポケットの中のお守りを軽く握っていた。

どうか神さん、また平次と同じクラスになれますようにー。

3年2組

「また服部君と同じやけん、よかったなあ」

「あっあほーうれしゅーないわ！」

あ、いた。やっぱり真ん中で男どもと話しとる。

「は？和葉かいな。また同じクラスかいな。しつこいっちゅーとるやろ？」

「何様のつもりやアホッ！！私かて平次と同じクラスになったら、推理バカがうつるんや、勘弁して！」

「なんやとー?!」

いつものけんかや

いつものアタシ・・

でもなんかちがうんや

平次が、なんか・・いつもとちがう・・？

「なあどないしたの？」

平次に説いてみる。

「は？何がや」

「何がって・・平次なんかいつもの平次とちがうんやもん」

「え？アホ！べっ別ににいつもと一緒にやぞ？」

心の揺れを感じた

そう平次の心の揺れ

いつものあいつになかった

心の揺れ

「ほーそないなんか・・・なあ放課後屋上でちょっとええ？」
「まあええけど・・・」

もしかしたら平次

気になる人が出来たかもしれへん・・・

それをちゃんと確かめるんや・・・

・・・

- 放課後

「で、何なんや、和葉。用って言うのは」
「あ、うっうん。平次、今好きな人とかいる？」
「はっはあ？」
「だから、気になる人とかいるんかってきいとるやろ？」
「あっあほ！？いついるわけないやろ！」

平次の顔がぼわつとした感じで赤みが広がる。

あ、おるんや・・・

そう感じた。

どんな子やろ・・・どんな子やろ

きつと蘭ちゃんみたいに優しゅうて、かわいいこなんやろっなあ・・・

・

・・・

「ふーん、まあ別に私には関係ないしなあ」

「だったら呼び出しすんなボケ！！」

「ボケで悪かったなあ・・・」

・・・いつもの口げんかが今日はえらい痛く感じる

何でやろ・・・平次に好きな人ができたからってアタックすればええ事なのに

でも一番は・・・

「・・・」

「どっどっした和葉」

「なんで教えてくれひんかったの？」

「え？」

「好きな子が出来たら幼なじみの私にだって教えてくれたってええやん・・・」

「・・・はあ？」

「私だって・・・私だってなああんたの幼なじみとして、いい女になりたいんねん」

「べつべつに俺は好きな奴なんか・・・」

悔しかったんや

平次にちよつとでも気になる人がいたのが。

せめてその人のことでも教えてくれれば、平次の理想のオンナに近づける。

たった・・・たったそれだけの事のはず・・・なのに

「私だって今好きな人くらいおるわ！平次の好みの女が分かったら、好きな人とも近づけるやろ？」

好きな人はあんたや。

その一言をいいまいと歯でかみ殺す

勝てるわけがない

そう、幼なじみという事から・・

恋という言葉が勝てるわけがない

それがなんか、悔しゅうて・・

「この前のバレンタインのチョコレートだって、幼なじみのあんたのために特別に作ったんや・・。でもあんたから帰ってきたんはコンビニの飴やんけ・・」

「あつあれは・・」

「前からあんたの事、幼なじみとして一応信頼しとったけどなあ・・。私にいけない秘密がこんなにあること、知らなかったわ！！もう・・もう・・」

「かつ和葉・・」

頭ん中がかつと熱くなり言っでもうた

「幼なじみでもなんでもないんや！」

そっさい残し、私は屋上から出て行った・・

もう・・幼なじみでいることも無理なん・・？

泣きたいけど泣けない・・

・・

FILE・1 幼なじみ（後書き）

和葉「作者め・・・けんかせおつたな・・・」

作者「ごっごめんごめん！！この方が話し面白くなるからな！！」

平次「にしても・・・また俺が悩み役かい！」

作者「しょーがないです。まあ平次を悩ませる理由は色々あるけど・・・」

平次「作者の勝手な都合やんけ！！」

次回もよろしくお願いします！

次は平次視点ですよw

FILE・2 微かな思い

俺は・・・和葉を傷つけてしもたのか・・・？

学校の帰り、私服に着替え何気に通天閣を歩く、平次の姿があつた。

あの時・・・和葉に言われた一言、たった一言だけどちゃんと胸に焼き付いている。

「もう幼なじみでも何でもないんや!!」

幼なじみとして、何でも知っていると thought 和葉は何かを隠している自分に腹が立ったこと・・・それは十分分かる。

何かってなんや？

和葉は好きな人がおらんかと俺に聞いた。

いないというのは本当や。

特に何も隠してない

でも・・

気になる奴はいるんや

負けず嫌いで・・泣き虫で・・意地っ張りで・・

でもホンマはえらい弱い奴が・・

幼なじみだけど・・気になつとるんや

それなのに・・それなのに・・

いつの間にか町のはずれまで来ていた。

この時間はちょうど夕方ということもあつて
たくさんの人とすれ違う。

ギャル系の子、サラリーマンにOL。
学校帰りの学生に、観光客。

当たり前の事だけどそれぞれ人々はみんな違う。

一人一人違う人間であることは確かだ。

その違う人間という中に・・

和葉をいれても・・

『ただの幼なじみ』としかならないんじゃないか？

ふとした拍子に目に入る、ホワイトデーのプレゼントのあまりモノに気がついた

《ホンマはちゃんとしたトコで買うつもりやったんけどなあ・・》

あの日大きな事件があってコンビニでしか、買うつところがなかったのだ。

自分でも悪い事をしてしまったのは分かっている。

でもせめて、ホワイトデーには間に合わせたかったからなんや・

なあわかつとるか和葉・

俺はお前だけにお返し、やったんやで

幼なじみのお前にだけ・

和葉。

俺が悪いんなら謝る

でも俺・・ほんまに間違ってるんか？

幼なじみという言葉が、痛く心に容赦なく突きつける。

それは今までに感じたことがないほど、強くはじけるような痛みだった。

『あの姉ちゃんの事が好きなんじゃねーか？』

あいつの言葉を思い出す。

柔らかな物言いだっただ、どんな言葉よりも頭の中に住み着いて離れない。

・ ・ 工藤。

やっぱ無理や

和葉を ・ ・ 和葉を好きになることはできん

幼なじみや ・ ・ ただの幼なじみや ・ ・

たった ・ ・ たったそれだけの関係。

これで何かまちがったとるんか？東の高校生探偵 ・ ・ 。

鼓動が激しくなる。

汗がにじみ出る。

・・・やっぱり・・・やっぱりなあ・・・

「あら・・・何を悩んでいるのかしら西の名探偵さん？」

聞いたことのある声がした。

FILE・2微かな思い（後書き）

平次「・・・？誰や聞いたことがある声って」

作者「作者が個人的に好きなキャラですよ！！」

平次「誰やるなあ・・・？」

作者「次回登場！お楽しみに♪」

FILE・3 志保との会話

赤みがかかった茶髪にショートボブ。

大きいコートに白いストール。

黒いベルトがいくぶん際立って見えた。

・・・この女は・・・

「ちっこい姉ちゃんか。」

「あら・・・覚えててくれたのね。でも今は別に小さくないわ。

宮野志保と読んでくれるとありがたいのだけど。」

彼女は江戸川コナンが組織を壊滅させた後、APT X 4 8 6 9 の解毒剤を作った。

データは損傷しかけていたらしいが、何とか復元でき成功したらしい。

江戸川コナンは工藤新一へ、灰原愛は宮野志保へ・・・。

大人に戻った彼女はどこかへ一人暮らしをはじめたようだが・・・

「なっなんで大阪におるんや？」

「あら・・・大阪は情報がたくさん手に入るし、空港も近いから便利

だから・・・

ところであなたは何をしているのかしら？」

「・・・ちよつと学校帰りにブラブラしていただけや」

「あらそうなの」

彼女の顔がちよつとかすむ。

うそをつくのは苦手だ。

つじつまが合わなくなりそうで嫌になる。

「ま、いいわ・・・でもちよつと聞きたい事があるからつきあってく
れる？」

「えっええけど・・・」

振り向いた彼女に少し圧倒される。

ちがう。

何かが違う。

灰原哀のときだった彼女とは明らかに何かが違った。

あの切れ長の瞳や口調は・・・そのままの灰原哀だけど・・・

何が違うのか

それはおそらく・・・自分にはないもの・・・

「じゃ、ここね」

そこはいかにも志保らしい、落ち着いたふいんきのレストランだった

「はあっ？何でこんなところではなすんや。悪いけど俺、持ち合わせなんかないで」

「いいわよ私が負担してあげる。」

席に座ると志保はひとつため息をついて言った

「ごめんなさいね。いきなり誘っちゃって」

「いや別に、俺もちょうど暇やったし。」

空気が流れる。

BGMがバラードに変わった。

「それで・・・いきなりだけどこのごろあった事件の中で薬物を使った事件ある？」

「は？何言つとる？まさか姉ちゃん刑事になるつもりやないやろうな」

一呼吸おいて志保は言った

「厳密に言えば鑑識課ね。いま警察学校へ行ってるけど・・・悪かったかしら？」

「いや・・・別に・・・」

口の端をあげて志保は少し笑った

「ウソよ。私、医者になるつもりなの」

以外だった。

あれだけの頭脳を持っていれば研究者の道は容易い。

「なんで研究者の道へ行かんのか？姉ちゃんなら楽やろ」

「・・・もう忘れたかったのよ。組織の事や・・・父や母を殺した科学をね」

平次から目をそらす。

机に置いた手の指がトントンと単調なリズムで動く。

「え？」

ドクンドクン

平次の心臓が、志保の指のリズムと共に波を打つ

「何でや・・・」

平次は志保に聞いた

FILE・3 志保との会話（後書き）

平次「何や元ちっこい姉ちゃんか！」

志保「ま、そういうことになったわね」

平次「これからどうなるんやろ・・・」

志保「ボツになるまで楽しみにしとくわ」

作者「ハハ・・・次は志保視点ですよ！」

FILE・4 逃げちゃだめ・

服部君・・・あなたは知らないでしょうけど・・・

私、大人に戻ってから結構苦しんだのよ？

組織は解散したけど・・・私だって元組織員。

無罪になるなんて思ってもいなかった。でも嬉しかった。

服部君は机をたたいて何かに怒っているかのように、目を見開いていった。

「なんでや・・・もう組織は関係ないやろ？あんたは人殺しとちゃうんや！

あんたのおかんやおとんだって、組織に殺されただけで科学が殺したとは・・・」

服部君が静かに、それでもはつきりとした口調で言う。

もちろんそんなの嘘よ。科学がお父さんやお母さんたちを殺したんじゃない・・・
そんなの最初から分かっているわよ・・・
ただ・・・

息を吸い込む。心臓が高鳴った。

「本当は組織だけが原因じゃないわ……。理由があって東京から出たかったのよ。」

「本当は博士と一緒に住みたかったけど……」
「……けど？」

あの人がいたから……。そう、工藤新一。

私のせいで彼は幼児化してしまい、迷惑をかけた……。

何度も……。何度も私を助けてくれた……。

生きようと勇気づけてくれた……。

そんな彼に私は……。私は……。恋をしてしまったのよ……。
ホント、バカみたいだね。

彼には、毛利さん がいるのに……。

そう考えた瞬間、頭の中が真っ白になった。

「……だけど……。けどあそこにいれば……。工藤君が……」

「……え……？」

「あ……」

言っちゃた・・・

心の中の・・・つぶやきのはずだったのに・・・
バカ・・・バカ・・・

「・・・わかつとたぞ」

「え・・・？」

「姉ちゃんが工藤の奴に気が言ってる事・・・わかつとたぞ」

何かに耐えているような彼の顔。

事件のときもそうしているのかしら？・・・違うわよね。

ふと思いがよぎった

なるほど・・・さすが西の高校生探偵さんね？
それなら話が早いわ・・・

「なすとトマトのパスタでございます。」

ウェイトレスが絶妙のタイミングでやって来た。
自らの焦りに気づかれなくて、目をそらす。

「・・・別に私は工藤君に気がいつてたわけでも・・・」
「いいから話を続けろや」

フ・・・なら話してあげようじゃないの？

私の・・・私の悲しい想いを・・・

ま、どーせあなたなんかに分かるわけないでしょうけど・・・

自分自身の冷酷な感情に罪悪感がよぎる。

「^{あひこ}工藤君の想い・・・。また思い出すものかって今でも思うの。
バカみたいでしょ？どうせ結ばれるわけないん・・・だから・・・。
そばにいたって悩む必要・・・ないのに・・・。」

眼が熱くなる。なんでだろう。

目の前にいる彼がばやけてきた。

「そばにいと・・・自分が壊れてしまいそうで・・・それに・・・
毛利さんという工藤君を見るとつらいのよ・・・。」

ふつと涙があふれる。

熱いしずくだった。

それでもたった1粒・・・後は流れまいとして目に残っている。

「・・・強がるなや・・・全部話すと楽になるぞ」

無理に笑つて色黒の彼を見ると自分の中のものを、全部さらけ出しそうになった。

そう・・・あなたはそういう顔をしなくちゃ・・・無理じゃいけないけれど・・・

笑っている顔が一番にあっているわよ？

事件を解いた後の・・・その笑顔・・・

まるで・・・まるであのひと工藤君そっくりね・・・

その笑顔が一流探偵の条件なのかしら？

「フ・・・そうね。あのひと工藤君言ったのよ。運命から逃げるなって・・・でも私、逃げる事も大切だって思ったわ・・・だから大阪に逃げてきたのよ？」

逃げてばかりじゃしょうがないけど・・・無理に戦っても勝ち目がないときは、

逃げてもいいかなって思ってたね。」

服部君は椅子を引きなおして、真剣に聞いてた。

一呼吸おいて言った。

「あなたも逃げていいかといえばそうじゃない・・・あの子から逃げてばかりじゃしょうがないのよ・・・。」

彼は眼を大きく見開いて息を吸い込んだ。
そして小さな声で言った。

「あの子って和葉のことか・・・」

「ええ・・・。あなた、遠山さんと喧嘩でもしたんでしょ？」

「なっ何でそのことをしつとるんや？」

「分かるわよ・・・。元気なかつたから・・・。」

もう涙は乾いていた。

心の痛みも消えていた。

さっきの時間が・・・まるで嘘だったかのように

「あなた・・・逃げてはだめよ・・・。幼なじみから・・・。」

幼なじみという理由を付けて、あの子から逃げようとしてない？」

笑みを浮かべてみせる。こめかみに指を当てた。

「お互いよく分かり合えるなんて甘ったれたこと、考えてるんじゃないわよ？」

分からなくて当然、違う人間なんだから・・・。」

「そっそっなんか・・・。」

分かったような分からないような、彼の顔を見るとおかしかった。
席を立つ。

「ま、仲直りするためのアドバイスとしてはあなたの方から謝るとね・・・」

何に対してかは知らないけど・・・早く仲直りした方がいいわよ？
時間^{とき}はあつという間に過ぎていつて・・・謝ろうにも謝れなくなるから・・・」

「そっそれってどういう意味や！」

「幼なじみでも油断は禁物ってわけ・・・」

ま、あなたの気持ちをはつきりさせた方がいいかもしれないわね・・・
あの子が好きなのか・・・ただの幼なじみなのか・・・」

自分で言ったことはよく分からなかった。

でも今日、彼に言おうとしたことは伝わったはずだ。

彼は私みたいに、自分の想いにはつきり気づかなくて・・・逃げてしまわないで欲しい。

そう感じたのだ。

「じゃあ・・・またなんかあったら連絡ちょうだい・・・別にかけてこなくてもいいけど」

「へ？」

身体が勝手に動いて携帯電話の番号を渡す。

そのまま彼のことも見ずに、出て行こうとした。

「ちょっと宮野！」

普通の苗字で呼ばれる。

彼には『姉ちゃん』としか呼ばれた事は、ほとんどなかったから不自然だった。

「・・・何よ」

「自分、彼氏とかあるか？」

「はあ？」

いきなりの質問に顔がほてる。

「あーその顔はいないんやなー！」

「いないわよ・・・別に欲しいとも思っていないから・・・！」

ちょっと怒ったふりをして出る。

「おっおい姉ちゃん！」

もう振り向かない。呼んでいる彼を背にしてさっさと出て行った。

FILE・4逃げちゃだめ・・・（後書き）

服部「結局、おかん呼び出して食事代金払わされたんや!!」

志保「悪かったわね。こっちも混乱してて・・・」

作者「次は蘭視点のつもりですよー！感想よろしくお願いします！」

FILE・5 正午の東都カフェ

日曜日の昼。

私と園子は和葉ちゃんと

東都タワーのカフェで、待ち合わせしていた。

何のことは分からないけど・・・何か悩みがあるみたいだったな・・・。

人ごみの中で、ひときわ目立ったボニーテールの女の子がいた。

「和葉ちゃんーん!!」

大声で呼んでみる。

振り向いた和葉ちゃんは寂しげな笑顔をつくって言った。

「蘭ちゃんに園子ちゃん・・・ごめんな。アタシの勝手に誘っちゃって・・・」

突然、誤る和葉ちゃんを見て、私はとてもびっくりした。
え?どうして?

いつも明るく振る舞う和葉ちゃんとは・・・少し

違っていた。

「う、ううん！全然いいよ。じゃああその席に座ろうか！」

園子がわざと明るい声を出して、近くの席を指差した。
私も一生懸命、椅子を引いたりして明るく振る舞う。

「せやね・・・ハア・・・」

和葉ちゃんはため息混じりに答えていた。

一通り注文したあと、本題に入った。

「・・・で？どうしたのよ和葉ちゃん！悩みがあるなら言つてよ！
友達なんだからさよ」

園子が笑って聞いている。

人を元気にさせられるのが、園子の抜群の長所だった。
ちよつとうらやましいと思ってみたりする。

和葉ちゃんは紅茶を軽く口に付けながら、遠慮深くいい始めた。

「うっうん・・・。アタシ、この頃平次の様子が変で、ちよつと気になつてたんや。」

それで聞いてみたんよ・平次、今好きな人とかある？つて」

「ええー！！」

私と園子はいっせいに声を上げる。

あまりにも大きな声だったので、後ろにいた子連れの女の人が振り返った。

赤面して謝る。

「それでそれで？もしかして服部君は『そうや、お前のことが好きなんや』

とか言っちゃたの？」

顔が思わずほてってしまふ。

いかにも園子らしい考えかただった。

和葉ちゃんはいかにもあわてた感じで、真っ赤になりながら反論した。

「そっそんなわけないやん！それで平次な、もちろん居るわけがないって・・・」

アタシに言ったんや。でも平次の顔は赤くなってて・・・。」

びっくりした。

驚いて聞き返してみる。

「あの服部君が・・・？本当に顔が赤くなってたの？」

「うっうん・・・。」

そう、和葉ちゃんは確かに、服部君の顔が赤くなっていたと言った。怒っているわけでもない、興奮してるわけでもない・・・

あの・・・恋心の赤みだったと・・・。

新一の顔の赤らみが、ふと頭の中によぎる。

「・・・それでな、いるかと思ったたらなんか悔しゅうて・・・気づいたら逆上してたんや・・・」

和葉ちゃんは俯いてそう言った。

私はうんうんと頷いてみる。

コーヒーを手にとって本音を呟いてみた。

「そつかあ・・・やっぱりいるかと思うと悔しいもんね・・・。私も一時的にそんな気持ちになったこと、あるなあ・・・。」

園子と和葉ちゃんが驚愕したように、私をじっと見てきた。

そう、それは本当だった。

新一が事件から帰ってきたあと・

私に告白したあと・

誰かを一生懸命に、探していたのを覚えている。

ただの人探し依頼では無いかのように・

本当に一生懸命に・

半年たっても、結局その人は見つからなかったようだった。

今はこうして、仲良くしているけどあの時はすごく、不安だった。

「どうしたの、蘭？」

園子がパフェを食べながら、心配そうに聞いてきた。
和葉ちゃんも心配そうに覗き込んでいる。

「ううん、何でもないよ！それで和葉ちゃん、その後どうなったの

？」

和葉ちゃんはこくりとうなずいてから、椅子を座りなおして言った。

「もちろん・・・ここまでアタシが悪いんや！勘違いかもしれへんし・
でも・・・でも・」

息を大きく吸い込んでから、解き放つように和葉ちゃんは言葉を口にした。

「平次を探しに、町の方へ行って見たんや・・・。そうしたら・・・や
レストランの中に平次がおって、呼んであやまるかと思ったら、女
の人も一緒にいたんねん！」

「・・・！」

「それで・・・それでやその女の人がただの女の人やったら・・・まだ
いいんや・・・。」

その人、赤みがかかった茶髪だったから、ハーフだと思うんよ。
すつごく美人で、なんか分かんけど・・・泣いてたんや!!！」

「ええー!!!！」

思わずコーヒークップを落つことしそうになった。

・泣かせた・泣かせた・なっ何のためによ!!

思わず自分のことのように、激しく怒りともいえる感情が湧き起る。

汗がにじみ出て、押さえきれない気がする。

落ち着け・落ち着け・

自分を自分で落ち着かせることが、どうにも難しい。

息を吸い込んでみた。

園子は、居ても立ってもいられないという感じで、その場から立ち上がった。

「はっ服部君、どういっつもりかしら？このままでいいわけないわ
！」

「うっうん……。そうやけど・」

遠慮がちに園子を見上げる和葉ちゃんに向かって、手を肩にそえた。

「大丈夫だよ、和葉ちゃん。きっと服部君も和葉ちゃんと喧嘩して後悔してるって！」

仲直りできるよ！服部君だって・・・きつと・・・きつと・・・」

和葉ちゃんのこと好きなのかもしれないよ？

その一言を飲み込んだ。

きつと・・・なんてただの予想に過ぎない。

絶対・・・といえない限り、未来は変わっていかないのだ。

服部君が・・・『絶対』和葉ちゃんのことを好きになるまで・・・応援するから・・・。

「きつと・・・？」

「あ・・・なっ何でもないよ！じゃあ、せっかく東都タワーに来たんだから景色でも見ようか！」

園子と和葉ちゃんの手を引っぱって、私は青い空が見える展望台へ向かった。

日曜日の青空の反対側には・・・なぜか黒い雲が潜んでいた。

FILE・5 正午の東都カフェ（後書き）

平次「・・・何の勘違いをしてるんや・・・？」

作者「ま、色々大変ですなあ」

平次「他人ごとのようにしてるなボケ！！」

作者「・・・じつ今回は・・・一応平次視点のつもりです・・・」

FILE・6 想いのtruth

和葉たちが東都タワーにいた頃・・・平次は東の高校生探偵・工藤新一の家にいた。

話がある・・・と誘って、工藤家へ行ったのだ。
相変わらず豪華な家やなあとつぶやいてみる。

大きな本棚で埋まった部屋についた時、工藤はいきなりこう言った。

「大丈夫だ！蘭は誰かと出かけてるし、当然父さんや母さんもおいねーから」

「は？別に俺はだっ誰がいたってかまわないんやけど・・・。」

振り向いた工藤は、俺の友人ではなく、探偵の顔をしていった。
フツと微笑みすぐに笑顔を消す。

「バーロ・・・本当は誰もいなくて安心したくせに・・・。おめー和葉とでも喧嘩したんじゃないか？」

確信をつかれて焦る。

「なっなんでわかったんや？．．確かにホンマの事やけど．．。」

「おめーのいつにも無いしよくれた顔で分かったんだよ．．こういう顔をするのは好きな人に振られたか、喧嘩したかのどちらからだからな．．。」

「はあっ？また好きな人好きな人って．．。」

「なっ何のことだかさっぱりねん．．。」

「あっあんなあ！俺は別に和葉のことなんか．．。」
「原因はそれだろ？」

多少丸い目を切れ長にして、工藤は言った、
「何もかも．．見透かしているような．．そんな眼だった。」

「まったくこいつには．．かなわへんなあ」

「おめーが自分の気持ちをはっきりさせないから．．和葉が耐えられなくなっ．．」

「聞いてきたんじゃないのか？『好きな奴いるか』って．．」

「おっおい．．なんでそこまで知ってるんや？」

「俺も経験あるから・・・怒らせちゃったこと・・・」

びつくりした。当たっている。確かにその通りだった。

和葉、好きな人がおるから好みの参考にしたいって・・・言ってたしなあ・・・

気になって当然や・・・

「確かになあ・・・和葉^{あいつ}、好きな人いるって言うてたし・・・。
多分、俺みたいな奴で好みが聞きたかったってわけやな・・・。」

思ったことを言ってみる。

「・・・服部・・・。おめー・・・本当にそう思ってるのか？だとしたら相当鈍いな・・・。」

鈍い・・・？俺が？なんでや？

疑問符が頭の中にたくさん浮かんでくる。

「和葉、ずっと好きな奴いたんじゃないか？いつも傍にいる奴・・・。」

傍にいた・・・誰の事や・・・。

「・・・ま、まずはおめーの事が先だな・・・。何で和葉が怒ったのか・
それを言ってくれねーと・・・。」

工藤は、ホームズを指の先でピアノを弾くようにページをめくっている。

「そつそれはやな・・・。さっき工藤が言ったように、和葉がなんか俺に聞いてきたんや・・・。」

『好きなやつはいないんか』ってなあ

「・・・それでおめーはなんて答えたんだよ？」

「『おるわけが無いやろ』って正直にいったんや！そしたらあの女いきなり怒り出して・・・。」

ふと指を止めてから工藤は言った。

「おめー・・・なんか隠してたろ・・・。顔に出たんだな・・・。」

「？」

顔に出る・・・？

ああ・・・喜怒哀楽・・・表情の変化・・・か

「『もしかして和葉のこと好きになっでもたんでんがな』とか思
つてたとか？」

「アホッ！！それは関西弁とちゃうぞ！」

突っ込みを入れながら焦る。

そうだ・・・あの時・・・何かを考えていた・・・

そう、和葉のこと・・・

幼なじみとしてではなく・・・気になる女として・・・考えていた・・・。
腕を組んで、考えてみる。

「すぐにばれちまうんだよ・・・顔に少しでもあらわれたならば・・・
探偵は即座に真実を見つけ出す・・・ってな！」

なるほど・・・探偵は和葉のこと・・・やな？
真実とは・・・自分の心の中に潜んでいる・・・何かは分からない感情・・・。
。。

それはまだ何かは分からない・・・。
時には顔であらわしたり・・・予測もつかない行動をさせたりする・・・。
。

恐いもんやな・・・

工藤、お前の気持ち・・・ちょっと分かった気いもすんぞ。

「なっなんだよ服部・・・。」

「いや・・・あの姉ちゃんと同じこと言つとたなあと思つてな。」

工藤は目を丸くして聞き返した。

「姉ちゃん・・・って?」

「あん?しつとるはずやろ?あのちっこい姉ちゃ・・・ああ今はちっこくなかったなあ・・・。」

えーつと・・・あ!せやせや宮野っちゅう黒の組織の・・・」

言い終わる前に工藤は本をばさりと落として、こつ言つた。

「しつ志保がいたのか?!!」

「ん?まあな。なんや宮野の姉ちゃんお前に行き先教えてなかったんか・・・。」

吃驚した。なぜ工藤に言つてなかった？
汗がにじみ出てくるのがわかる。

「ああ・・・1年前から消息不明で・・・まさかとは思つたけどあいつ、組織の責任をとって・・・」

「みつ宮野の姉ちゃん明るくなつたとぞ！最初誰かわからんくらいやったし・・・」

自殺・・・その言葉をさえぎる。

もしかしたら当時の彼女も、選択肢の中にそれを入れていたかもしれない。

しかし彼女は負けなかった。逃げはしたけれど、勝利を手にした。

「大阪にいるのか・・・あいつに悪い事させちゃったな・・・」

「今度あわせたるか？俺、携帯番号教えてもらったんや。かけてみい。」

「サンキュ」

工藤に電話番号を渡してから、さっきの思いがまたよぎる。

もし・・・追い詰められたあの状況の中で・・・俺が宮野^{あいつ}だとしたら・・・

俺はホンマに勝てるんか・・・？

結論は簡単に出た。

無理やな・・・。

自分の弱さを初めて知った。

大切な人が・・・もし自分以外の者にとられてしまったならば・・・心の揺れには勝つことが出来ない。

事実だ・・・。

そう・・・その大切な人とは・・・

「服部。」

「あん？」

工藤は口端だけを上げて微笑み、こう言った。

「When you have eliminated the impossible, whatever remains, however improbable, must be the truth。」

《不可能なものを・・・除外していき・・・残ったものが・・・たとえばいかにありそうに無くても・・・それが真相・・・やな・・・？》

そっだ、というように平成のホームズはうなずき眉を上げた。

そうや・・

和葉^{あいづ}にただの幼なじみでも無く・・ただの女だけでもないんやっ
た
ら・・

残ったのは・・

和葉^{あいづ}が・・

和葉^{あいづ}の事が・・

好きだということ・・や・・

そう、目の前にあったのに・・それに気づかなかった・・

まるで、足元のコインのように・・・。

アホやな俺・・・。

大アホやな・・・。自分の気持ちに気づかんで・・・。

でも・・・このまま気がつかんかったら・・・自分の気持ちを認めれんかったら・・・後悔する事になった・・・。

そう、まだ遅くは無い。工藤が気づかせてくれたおかげや。

「ありがとな。」

小さな声でつぶやいていた。

工藤は聞き取れなかったようだ。

「え？ なつなにか言ったか？」

「別に何でもないわ！ じゃ、帰らせてもらっで。こんな本ばかりぎっしり詰まった部屋におったら氣いくるってしまつかもしれひんからなあ。」

「ハハ・・・悪かったな。」

そう言って立ち上がって俺を見送るとき、工藤は言った。

「真実・・・見つけられたか？」

振り返り帽子をかぶり直してみせる。
微笑んで、言い返した。

「ああ・・・お前のおかげで見つけられたで。ありがとな、工藤。」

今度ははっきり礼を言えた。

FILE・7大阪という場所

プルルルル

志保の携帯電話の通常着信音が、午後10時に鳴り響いた。
電話番号の羅列を見ると、一人の人間につながる。

工藤新一・・・。

バカだと思う。

もう自分に電話なんて、かけてくる分けないのだ。
そう志保は自分に言い聞かせた。

服部君に電話番号を渡した自分が、記憶によみがえる。

服部君が番号を教えたことくらいすぐにわかった。

無視してやり過ぎそうとしたが、一向に着信音はなり続ける。

おい、逃げるなよ志保・・・。いつまで逃げているつもりだ・・・。

工藤君の声がした・・・気がした。

そう読み取るとゆっくりと志保は息をはいた。

乱暴に会話ボタンを押し、もしもというと彼の声が聞こえた。

「よう志保！」

想像していたよりずっと弾んだ声だった。

怒るというよりあきれてしまった。

「あら・・・東の高校生探偵さんもういぶんと暇になったものね。それとも何？また小さくなったから解毒剤でも請求してきたのかしら？」

「おめー相変わらずかわいくねーな・・・。」

灰原哀のときでも散々、言われ続けていた言葉だった。

あの時は笑いながらも痛い言葉だった。

あの時は。

もう彼の言葉など痛くない。

自分の彼への想いを、打ち切ったのだから。

「別にかわいくなくても結構よ？私にケチ付けに来たのなら今すぐ

切るけど。」

「バーツ！！ちょっと待てよ！俺はお前に話があるんだ……。」

「……何？」

話と聞いて志保の心臓がドクンと波打つ。

バカね私……。何言われてもかまわないはずじゃなかったかしら？

「なあお前……。今大阪にいるんだよな？しかも友達もいないで……辛くないか？

言えよ……。本当の事、もう組織は全滅したんだぜ？逃げる必要なんて……。」

下手な説明……。

静かに笑ってしまう。

「あら……。逃げているつもりなんてないわよ？ただ大阪は便利だし、資料も結構楽に手に入るわ。医者勉強にもってこいじゃない？」

「おめー医者になるつもりのか……。？」

「ええそうよ。あなた言っただわよね？組織壊滅後……。『自分自

身のやり方で罪を償っていけばいいんだ……。法律ではおめーは犯罪者じゃねーからな』って……。

私は人々を助けるといふ形で罪を償って生きたいの。」

「そうか……。ま、志保の勝手だからな。でも悪いことしたな。ごめん……。」

志保は何に対して謝っているのかすぐに分かった。

組織壊滅後の志保の態度からして、新一は志保の想いにわずかに感づいていたのだ。

それをちゃんと伝えないで、蘭に告白してしまったから……。

彼女が痛く傷ついたのだと思ったのだろう。しばらく黙り込んだ。

「別に全然かまわないわよ？大阪に来たのは私の勝手だし……。」

わざとはぐらかした。

最後まで……。彼には自分の想いがあったことを気づかれなくなかった。

「なあお前さ、服部に会って言ったんだろ？逃げるなって……。服部^{あいっ}だいたい影響受けたみたいだぜ？お前の言葉に……。

おめーもさ……。自分の勝手だと思うけど、東京に戻ったらどうだ

？」

答えは簡単だった。

「戻るつもりは無いわ。」

そう、大阪に来て自分はずいぶん変わった。

19歳という年齢らしくある程度明るくなったし、何よりも接してくれた人々が親切にしてくれた。

関西の方言は最初はおかしいと思ったけど、聞いていくうちに温かみを感じるようになった。

私はこの都市が好き……。

知らぬ間にそう感じるようになったのだ。

「そうか……。ま、頑張れよ……。応援してるからな。」

「あらありがとう。そっちこそ推理ばかり熱中して彼女に心配かけさせないようにしなさいよ。」

そう言って返事を待たずに電話を切った。

そういえば服部君、和葉と仲直りできたのかしら？
それより……

服部君が、自分の和葉^{あのか}への想いに気づいたのかどうか気になる。
まるで面倒をついつい見たくなくなってしまふ、弟のような存在だ。

「くすっ」

考えてみておかしかった。

今度また、会ってみようかな。

FILE 7 大阪という場所（後書き）

志保「ま、騒がしい感じもするけど大阪は好きよ。」

平次「せやろー！色んなモンあるでー！何欲しいんや？」

志保「そうね。実験人体かしら・・・。」

平次「・・・怖いなあ・・・。」

FILE・8 痛い幼なじみ

1週間後・・・。

和葉は4月の今でも桜が舞い落ちる、誰もいない公園にいた。なぜ来たのかは、自分でもはっきり分らない。

何でやる・・・。

足音が聞こえた。

振り返る。そこには・・・。

「へ・・・平次・・・。」

「和葉・・・。」

急に出てきた平次に、和葉はとてもびっくりした。

平次も驚いた表情で口を半開きにして、眼を見開いている。

しかし二人ともすぐに顔をそらした。

やっぱり顔をあわせるのは気まずい。

「平次、こんなところで何してるん？」

「それはこっちのセリフや・・・何してるんや・・・和葉。」

風が吹く。和葉は髪をかきあげ呟いた。

「何してるんやろなあ……。」

「はあ？」

「それが自分でもわからへんのや。知らず知らずに歩いていたらここに來てて……。」

本当のことだった。

自然に足がここへ運ばせたのだ。

桜が舞い続ける。

「平次こそ……どうしてここにきたん？」

「俺はやな……正直言うと初恋の人、思い出しとったんや……。」

「

初恋の人……。

そうか……あの時顔が赤くなってたんは、初恋の人のことを思い出してたんか……。

思うと少し辛かった。

やっぱり好きな人が居たと……。

レストランで見た茶髪で美人の女の人の顔が、頭によぎった。

ふっと息をはいて平次は後ろを向いた。

「桜見とつたら・・・どうしたらいいか分かるかもしれへんし・・・」

「

平次も悩み続けていたのだ。

和葉との衝突・・・。

飛び交う様々な想い・・・。

色々なことがごちゃごちゃになって、一つにまとまらなかった。

でも桜を見ていれば、分かるような気もしたのだ。

和葉は平次の背中に向かってはつきりと、本音を口に出してみようと思った。

悩んでいてもしょうがない。

「ごめんな平次・・・。アタシ、ちゃんと平次のこと理解してへんかった・・・。」

好きな人が居るなんて、平次の勝手やもんね。でもな、これからも幼なじみでいたいんや・・・。」

和葉はそういつてから桜を見上げた。

振り返った平次の瞳が一瞬、哀しい色に変わったとも知らずに。

幼なじみ・・・か・・・。

やっぱり幼なじみであることしか出来ないんやな・・・。

『まーるたけえびすにおしおいけ・・・よめさんろっかくたここにしき・・・』

あの手まり歌が心の中で流れていく・・・。

いや・・・ただの幼なじみや無い・・・俺の初恋の奴なんやからな・・・。

「ま、それでええこつちや。俺も悪かったな和葉。嘘ついて・・・でもな初恋の人の名前は教えられひん。お前だけには絶対や!」

「えー!! あたしには教えてくれひんの? なんでー?」

「それは幼なじみやからや。」

目の前の初恋の人に、軽く嘘をついて背を向けた。

幼なじみという言葉は、もう卒業したい。

あの工藤やって姉ちゃんともう、幼なじみじゃないんや。

「平次！初恋の人、もう泣かせたらあかんよー！！」

和葉は思い切って言ってみた。

自分はその人に絶対に負けない。

好きだから・・・平次のことか・・・。

負けない。

勝ってみせるんや。

必ず・・・。

二人の幼なじみを、桜がやさしく包んでいた。

FILE・8 痛い幼なじみ（後書き）

平次「やっとこのへんてこりんな小説も終わったなあ！さいなら」
作者「ちよつちよつと待て！まだ終わってないって！これからだつて！」

和葉「何やまだ続くん？大変やなあ・・・。」

作者「・・・次回もよろしく願いします・・・。」

FILE・9 ライバル登場？

私立改方学園 ー。

「よう！服部。」

「よう。」

級友と言葉を交わしながら、席に着く。

「おい服部。遠山と仲直りしたんか？」

「へ？あ、まあ普通に……。でも何で喧嘩したって知ってるんや？」

あの時のことは工藤以外、誰にも話してなかった。
なぜ知っているか不思議に思う。

「え、だってほとんどの人が知ってるやろ。なんか分かんけど、
広まっとるなあ。」

おかしい。

誰か見ていた人がいるのか……。

考えただけでちょっと恐くなった。

「みんな知ってるんか・・・まあたいした事無いから大丈夫やけどな！」

その時、もう一人の友人がいかにもあわてた様子でこちらに向かってきた。

緊急事態のようだ。

席を立て聞いてみる。

「ん？どないしたんや、そんなあわてて・・・。」

「どないしたって平次・・・。今きいたんやけど、遠山に言い寄ってる男がいるって話や無いか！」

え？

なっなんやと・・・！言い寄ってる・・・？

「なんでや！どうして和葉が・・・。」

「何でも遠山にベタベタらしいぞ。俺はデマだと思っんやけどなあ。」

「名前は・・・？」

「風上秀樹。D組や。むちゃくちゃハンサムで女子にモテモテらしいで。」

風上・・・秀樹・・・？

聞いた事無い名前やなあ・・・。転校生やろか？

「いいんか、服部？」

「ん？」

「遠山、そいつに持って行かれるかもしれへんのやぞ？積極的に行かないとどうするんや？」

「どつどうでも良いに決まっとるやないか！和葉のことなんか・・・。ただの幼なじみやしなあ！」

わざと茶化してから心が揺れた。

・・・そうだ。積極的に行かなければならないのだ。黙って見ても何もならない・・・。

心で誓ったのは自分ではないか。

「俺、そいつんどこへ行って話聞いてくる。」

「行け！服部、負けんなや〜！」

「アホ！俺は幼なじみとして、聞いてくるだけや〜！」

振り返らずに教室を飛び出していった。

FILE・10 戦い予告

走って走って。

本来ならば歩かなければいけない廊下を、懸命に走る。

3―D組・・・ここやな！！

早速『風上秀樹』を呼んでもらおうかと思い、声をかけようとする
と・・・

「ん？確か君は服部平次君・・・かな？」

ブラウンの髪に細身な体。

背は自分と同じくらいのものだろうか。

確かに眼は切れ長で、鼻はスツとしている、中々の顔立ちだった。

「おおそうや。何や自分、見かけたこと無い顔やな・・・。」

「それはそうだ。僕は東京から来た転校生・風上秀樹さ。宜しく。」

風上・・・秀樹

こいつやな、和葉に言い寄ってるっちゅう男は……。

「なら少し話でもさせてくれんか？聞きたい事もあるしなあ……。

」

「……別にかまないけど？君に言いたいこともあるんだ。

でも今からホームルームだから無理だしねえ。放課後の5時に屋上に来てくれないか？」

ほ……呼び出しか……。えらい自信持ってくれるやないか……。

「ああ……別にかまわへんで？ほんならびびってこれなくなる事が無いようにお願いするで。」

「……。」

自分で言って背を向け、あとにした。

あの軽い態度……。よっぽど余裕があるんやなあ……。何様のつもりや。

何もかも全てが腹立たしい。

問題はどうして和葉と喧嘩しているということが、学校中に広まっ

てるといふ事・・・

もう一つは風上秀樹が、なぜ和葉に言い寄ってるといふこと・・・。

頭ん中がごちゃごちゃしうて整理できへん！！

「あれ平次・・・こんなとこで何してんの？」

幼なじみ・・・いや初恋の人と言うものだろうか・・・とにかくあいつが声をかけてきた。

「いや別に何でもないわ・・・それより和葉、風上秀樹うちゅうやつしつとるか？」

和葉はなぜか少し顔を赤らめて答えた。

「あ、あゝあの人のことやね？この前、あの人、アタシの美術作品をものすごく褒めてくれたんや。」

「めっ面識あるんか？」

「あるも何も・・・こっ・・・いや何でもないわ！その人がどないしたん？」

「いや…何でも無いわ。」

妙にもどかしかった和葉が一瞬不思議に思えたが、今はそれどころじゃないと思った。

ほろ…言い寄ったってのはやっぱ嘘やったか…。
面識あるだけで、そないな噂流しよって…。

怒り…それとも嫉妬だろうか。

心の中で何かがわいてくる。

激しく、強く。

何が何でも負けたくないという、感情だった。

改方学園屋上、午後5時。

戦いが始まる。

FILE・11 追い詰められ・・・

放課後・・・5時

屋上へ行くと、もう敵は待ち構えていた。
空を見上げて。

やがて自分に気がつくと、微笑み言った。

「ふうん・・・。もう来たんだ。」

「あつたりまえや無いか。・・・で目的はなんなんや？」

風上はふつと息を飲み込み、声を静かにあげて笑った。

「へえ？何の目的かい？」

「何の目的って・・・お前が和葉に言い寄ってるうちゅう噂を自分で流したことや！和葉に何するつもりや・・・。」

風上は、それを聞いて声を高らかに大きな声で冷笑した。
突然の行動に戸惑う。

「ん？何がおかしいんねん。」

「いや？君もただの幼なじみの和葉ちゃんに対して、こんなにも敏感なんて思いもしなかったからねえ。」

「たつただの幼なじみとちや・・・」

言い終わるか言い終わらないかの間に、風上秀樹は切りつけるような声で言った。

「へえ？違うのかい？君たちはお互にただの幼なじみ。君は他に初恋の人がいるんだろ？」

「なっなんでそこまで知ってるんや・・・。」

「悪いけど少し調べさせてもらったから・・・父は警察官なんだ。だから調べるのは得意さ。」

和葉ちゃんだって君には関心が無いわけだし・・・。」

「なっ・・・・・・・・。」

心の中をズバツと切りつけられた感覚が、自分を襲う。立っていられないくらい、強い痛みだ。必死で足を踏みなおす。

君には関心が無いわけだし・・・

関心が無いわけだし・・・

カンシンガナイ・・・

「ふざけんなや！！和葉が俺のことを・・・そんなふうに見とるはずなんてあるわけが無いやろ！」

「へえじゃあどんなふうに思ってるのかな？」

「・・・っ・・・」

どんなふうに思っていると言ったって・・・
考えられようが無かった。

ただの幼なじみ。

小さいころから一緒にいた幼なじみ。
喧嘩を繰り返した幼なじみ・・・。

幼なじみ。

そういうふうに思っているとしか、考えられない。

他にどのような選択肢があるというのだ。

それよりこの男。

風上秀樹。

こんなに強く、激しく追いつめられたのは生まれて初めてだった。

恐ろしかった。

単純にそう感じた。

自分が今までに見つけてきた犯人も、いつもこんなふうを追いつめられてるのだ。

辛いやろうな……。

『犯人を推理で追いつめて、みすみす自殺させちまう探偵は……殺人者とかわんねーよ……』

頭の中に工藤新一……いや江戸川コナンの言葉が流れ込んでいく。

ああ、せやろな工藤。

言葉一つで、こんなまでに心が痛むんや。和葉が聞いたら……たまらんこっちゃ。

ふっと息をはいてみる。

風上は足を一步前にして、口をあけた。

「それに僕はこの前、和葉ちゃんに告白したんだ。考えてくれるってさ。」

「なっなんやと!?!」

汗がにじみ出ていく。

頭の中にあいつの姿がよぎった。

嘘やろ・・・。

そう考えたかった。

FILE・11 追い詰められ・・・(後書き)

次回はやっと和葉が出てきます！

FILE・12告白されて・・・。

アタシは、学校からだと帰る気にもならず町の方をとぼとぼ歩いていた。

『君のことが好きなんだ。』

『考えておいてくれないか。』

風上くんの声が聞こえてくる。

その言葉に、鼓動が激しくなった自分がバカだと思った。

もちろん断るつもりでいた。

でも相手の勢いに押され、

『かつ考えさせてくれへん？』

そう言ってしまった。

告白する相手が、自分の心に迫ってくると感じたぐらいだった。

返事は・・・何日でもいいから放課後の5時。

待っている・・・と言ってたなあ。

平次・・・どないしたらええん？

助けてや・・・平次・・・。

断ってしまうと、何か大変な事になりそうな気がした。
頭の中に何かが住み着いているように、鈍痛がはしる。風邪でもひ
きかけているかもしれない。

こういう時・・・親身になって聞いてくれる友達がいたらなあ・・・
そう、蘭ちゃんの場合、園子ちゃんみたいなの・・・。

特別に仲のいい女友達はいなかった。
幼稚園のころから、ずっと男の子たちの中にまぎれて遊んでいたか
ら・・・。

はあ・・・最近悩み事ばかりやわあ・・・。
こういうのはホンマの青春っちゅうんやろか？

いくら春といっても、夕方は少し肌寒かった。
風が強く、吹き付けてくる。
コツコツと色んな人々の足音が、聞こえていく。

「あらもしかして・・・服部君の彼女さんかしら？」

透き通るようなアルトの声が、足音に混じって聞こえてきた。

「かつ彼女とちゃう・・・え？」

どこかで見たことがあった。

そう、平次がレストランにいた時・・・一緒にいた綺麗な女の人・・・。
切れ長の目で整った顔立ち。異国交じりだろう赤みかった茶髪・・・。

どこからどう見ても、ものすごく美人だった。

「遠山・・・和葉さんよね？」

「なっなんでアタシの名前をしってるん？平次の事も・・・。」

「ええ、彼とは前に事件で面識があつてね・・・。ちょっとした知り合いってわけ。

私は宮野志保っていうの。よろしく。」

なーにがちょっとした知り合いやねん！！！！
思いつき一緒に食事したりしとるやないか！

ライバル意識がかすかに燃えてくる。

宮野志保？この名前・・・どっかで・・・。

「ほーそうなんか。で？その知り合いさんが何のようなん？」

「ええ、彼あなたのことでだいぶ悩んでたみたいよ。」

「え・・・平次が？アタシのこと？」

ちよつとだけ元気になれた。

たとえ幼なじみとしてしか見られてなくても、心配してくれて少し嬉しかった。

「ええ。それで奇遇ついでちよつと話でもしないかしら？」

ほーライバルと話を付けようっちゅうことやな？
望むトコや・・・平次は絶対にわたさへんっ！

「ああ、別にかまわへんよ？ならちようどええ。ここのカフェで話
しつけたるから。」

何がおかしいのかクスリと志保は笑って、カフェへ入っていった。

FILE・12告白されて・・・。(後書き)

平次「ふーん・・・今回の更新はえらい時間がかかったやないか。」
作者「こつちもこつちで色々・・・皆さん、更新遅れて本当にすみません!」

志保「ま、適当に頑張る事ね。読者さんたちが見捨てるまで・・・。」

作者「・・・そのとおりです。」

FILE・13 弟思考

コーヒーショップ

カフェを見つめたままだった彼女が、決意したように私のほうを向いて言った。

「あんた、知り合い言うてたけど・・・平次とはどういう関係なん？」

まったく・・・本当に負けず嫌いなだね。
服部君とそっくりだね。

大阪の人って、何処か必ず熱いものを持っている・・・。
ある意味でうつされたら大変よ。

コーヒークップを持ち上げて話した。

「服部君とはね・・・工藤君と一緒に、事件関係で知り合ったの。
前に私が犯人にされそうになった時、彼らが助けてくれてね・・・。
それくらいかしら？面識がある程度だけど・・・。」

不服そうに彼女はジト目で見てくる。
本当なのか疑ってるらしい。

まったく・・・。

「ホンマにホンマ？ただの面識がある程度なん？」

焦っている彼女を見て、自分の心に眩きが出た。

ちよつと本当のことを言ってみよう、そう言うのだ。

「ごめんなさい。本当は面識程度のもんじゃないわね。私はどちらかというところ工藤君にお世話になったの。何度も助けてもらったりして・・・。

服部君はね、そういう方面で私を助けてくれたの。彼を見ると元気が出るのよ。」

「なあ・・・宮野さんって・・・平次のこと・・・どう思ってるん？」

急に問われた質問に考えてしまう。

純粹な笑顔の彼が、浮かんでくる。

服部君は・・・工藤君よりもさらに熱い魂を持っていて、本当に一生懸命。

まるで太陽の塊みたいに・・・ね。その分危なっかしいけど。

でも工藤君みたいに恋心というものは、持たなかった。

そう、あえて言うならば・・・

「弟みたいな存在・・・かしら。危なっかしくて・・・熱くて・・・」

「そっそうなんか・・・。よかったあ・・・。」

ほっとした笑顔の彼女を見て、激励したくなった。
まったく・・・世話の焼ける妹みたい。いい加減、自分から行きなさいよ。

横にたれた髪を耳にかけ、息を吸い込んでいった。

「あなた、服部君のことが好きなんですよ？」

「ええ?! そっそんなわけないやん! へっ平次とはただの幼なじみなんよ!」

「ごまかさないで・・・。彼、あなたのことをきつと大切に思っている。」

幼なじみか、恋心かどうかは別として・・・それを知りたかったら自分からいきなさい。」

「・・・。」

顔を赤くして黙り込む。

分かりやすいわね・・・。それだけハッキリしてるならさっさと行

きなさいよ、バカ……。

彼女は何か言いたそうに、口を半開きにしている。

それを遮り、私は言った。

「あなたは間違っていないんだから……。きっとその気持ちは彼に届く……。

自分に自信を持ちなさい。あなたは幼なじみという特権を持っているのだから……。」

「とつ特権？幼なじみが？」

思わず工藤新一と、毛利蘭の顔が頭に浮かんだ。

幼なじみは、誰よりも……。もしかしたら家族よりも相手の事をよく知っている。

それを自信にしなきゃだめじゃないの。

幼なじみが恋のバリアを作っているのなら、利用してうまく恋の武器にすればいいじゃない。

「負けちゃだめよ……。幼なじみということに逃げちゃだめ。あなたなら勝てる。」

「みつ宮野さん……。」

感嘆とも言え、泣きそうともいえる顔を上げかすかに彼女は笑った。

似たもの同士だもの。分かりあえるわよ、きつと。

気づくともう、彼女はカバンを手に取り、帰るしたくをしていた。急いでいるような目だった。

「じつじゃあ宮野さん！今日はホンマにありがとうな。あ、これあたしの家の電話番号……」

今度一緒に話そうな。きつと……」

「ええ、そうするわ。じゃあ……」

本当なら電話なんかしたくわない。幼なじみを見ると、辛くなるから。

でも、彼女は彼女で気に入った。

結構いい子なのね。

やたら無鉄砲なだけの子だと思ってたけど……。吉田さんみたいじゃない。話していると楽しい。

テンションの上げ下げは激しいみたいだけど……

もう一回何か言おうとして振り返った。

何を言おうとしたか、自分でも分からない。

そこにはもう、彼女は居なかった。

FILE・13 弟思考（後書き）

こんにちは。桜草です。

あ、まともに後書き書くのは初めてですねw
最近ずいぶんと更新が遅れてすみません！

それでも私になりに、色々と理由が・・・

「ケホケホ・・・あれ？風邪かな？風邪ひいちゃったかな？」

・・・とこのように見事に風邪を引いてしまいました。

今は床につきながらキーボードを打ってます。

ちなみにもう一つ、衝撃的なことが！！

「・・・何？このテストの点数は・・・これはちょっとまずいよな・・・うん。」

・・・とテストで過去最低点数を見事に取ってしまい・・・精神的にもこの有様です。

なので更新が多少、遅くなる場合がありますのでご了承ください。

『どうしても早くして欲しい！』

と嬉しいことを言ってくださる方は、メッセージでどうぞ！期待通り頑張りたいと思います。

では。

FILE・14 平次だけ

アタシは走った。

一生懸命に・・・風上君が待っている学校の屋上まで。

息が切れてくる。

スピードが落ちる。

もうとつくに5時は過ぎていた。

待っているかは分からないけど、今はそんなことなんてどうだってよかった。

何で迷ったのだろう。

そう思った。

風上さんの告白だって・・・悩む必要は無いはずだった。
どんなにかっこいい人でも・・・頭が切れていい人でも・・・気持ち
ちは揺れない。

アタシの中での・・・ナンバー1は・・・

ずっと、ずっと平次だから。

平次が好きだから。

たったそれだけだけど、どんな思いよりもずっと強かった。

だから今は走る。懸命に。

でも・・・一つ、乗り越えなければいけないものがあった。

幼なじみ。

そう、それは険しい山のようにそびえ立っている。

子どものころに、仲が良かったこと。または仲の良かった人前に調べたとき、辞書にそう書いてあった。

恋に関連するものは一つもなかった。

ただの幼なじみで終わってしまうカップルは多い。
恋なんて・・・。

『自分に自信を持ちなさい。あなたは幼なじみという特権を持っているのだから・・・。』

ついさっき聞いたばかりの、志保さんの言葉が流れてくる。

そうだ。勝たなければいけない。

平次のことをただ、好きなだけ。

幼なじみなんて関係ない。

とにかく断ろう。

風上さんの告白には・・・。

アタシは平次しかないのだから・・・。

気がついたら学校についていた。

息を吸い込む。

落ち着いた。

走って、走って。

階段一つ一つを、しっかりと上がる。

時計を見たら5時4分。

ぎりぎりセーフや・・・多分。

屋上に続く残りの階段を、しっかりと踏みしめた。

FILE・14 平次だけ（後書き）

どうも、作者の桜草です。

皆さん！応援のメッセージ、本当にありがとうございます！
本当にすごく感動して・・・嬉しかったです！
期待に応えられるよう、頑張ろうと思います！

ちなみに・・・読者数がなんと、6000人を突破しました！
皆さん、本当にありがとうございます！

ではまた、応援よろしくお願いします！

FILE・15気持ちを言葉に

胸の鼓動。

吹き出る汗。

自分のものではない気がした。

「告白・・・されたやと？」

「ああ、返事はいつでもいいから午後5時。僕は楽しみにしているんだよ。」

告白・・・

恋をしている者にその気持ちを伝えること。

相手からいい返事が来れば、その想いは重なり愛しあうー。

そんな夢物語に、自分は関係ないと思っていた。

でも今は違う。

和葉のこと・・・。

あいつのことが好きだと知った時、そんなこともふと考えてみたりした。

もしあいつが告白するとき、あいつはどんな顔するんやろう・・・。

喜ぶだろうか、照れるだろうか、それとも『嘘つくなや!』と怒るだろうか。

相手にもよる。

もし・・・もしそれが・・・

自分だったら・・・。

「ま、ええわ。和葉もアホにはアホやけど、ちゃんと人を見る目くらいもつとるはずや。」

お前みたいな口だけの男に、誰がひっかかるかボケ!」

「ま、理屈だね。そんなの。そういう君はさ、和葉ちゃんのことどう思ってるの?」

「え?」

和葉のこと・・・。

何も想っていないと言えば嘘になる。

しかしほぼ初対面のこの男に、自分の気持ちを語るつもりなんてなかった。

でもただの幼なじみなんて言ったら、負けてしまっに決まっている。

うまく工夫して、自分の本当の気持ちをあやふやに試ってみようと思った。

「和葉のことか……。あいつはやな……。アホで間抜けでおまけに鈍くて、どーしようもないやかましいんや。でも時々鋭いし、なんか合気道でシバかれることも多いし、でもいきなり泣いたりするんや……。強いかわいかわいハッキリせえへんしなあ。」

その瞬間、少し身体が震えた。
微妙に殺気を感じた。

……。気のせいかな。

「ふーん君はそんなに弱い人間だったのか。知らなかったよ。」

「なっ何やと？」

「だってそうじゃないか。言い訳して逃げようとしているんだろ？ そんなごまかし、僕には通用しないさ。」

ほーやっぱり、言い訳の通用する相手と違ったやん……。ええ度胸やないか。

ならええわ。

こっちも和葉に対する本当の気持ち、ぶつけたる！！

本当の気持ちを明かすこと。
それはなかなか簡単ではない。

早まる鼓動、顔が赤くなってくるような感覚……にじみ出る汗。
それを全て受け止めなければ行けない。

ましてやライバルだ。

ライバルという敵に、他人の気持ちを伝えなければいけないなんて
寒気がする。

でも大切な人の告白と同じだ。

普通ならまだ時間はたくさんある。

これからライバルとして向きあっていくのならば、まだ時間はたくさんあるはずだ。

でもな。

今から伝えたるんや。風上にへやけど。

和葉への本当の気持ちっちゅうやつ……言葉にしてもおかしい
はずや。

きつと必ず……いつか言葉にせえへんといけないんや。

だから今言う……本当の気持ちを言葉にしてみせる。

「和葉はなあ！俺にとって……俺にとってこの世で一番大切な奴
なんや！

簡単にお前にひょいひょい渡すかボ・・・」

『ケ』の一字を言い終わらないうちに・・・

屋上のドアが開いた。

そこには・・・

和葉がいた。

FILE・15 気持ちを言葉に（後書き）

どうも桜草です！

風邪はひどくなる一方ですが、気合を入れて頑張りたいと思います！
さて・・・だいぶ最終回に近づいてきています。
皆さん、応援よろしくお願いします！

FILE・16きつと言えるから

アタシは最後の一段を上り、屋上のドアを開けようとした。
わずかだが、人の気配がした。

良かった・・・いる。

少しでも早く告白を断りたかった。
心に残しておく、どこかズキンと痛む。
そんな感覚から、早く逃れたかった。

しかし、ドアを開けようとするすると人の声がした。

・・・誰？

かろうじて少し開いている、ドアの隙間から見みると・・・平次
と風上さん・・・！
ちよ！まさか風上さん・・・平次に何か大変なこと言ってるのとか
やう？！

あわてて飛び出そうとした。

止めないと何か大変な事になりそうな気がした。

平次が何か言っているようだ。

ドア越しに耳を当ててみる。

どうやら自分のことを言っているようだ。

「・・・あいつはな・・・アホで間抜けでおまけに鈍くて、どーし
ようもないやかましいんや。でも時々鋭いし、なんか合気道でシバ
かれることも多いし・・・」

その後は聞こえなかった。

・・・ピキッ・・・。

血管が切れるような音がした。

へー・・・アタシのこと、そないな風に思ってくれてたんか・・・。
感謝せえへんとあかんなあ・・・。

口の端が自然に上がる。

怒り笑いつてやつだ。

何も考えようとせず、猛烈にドアを開けた・・・

「和葉はなあ！俺にとって・・・俺にとってこの世で一番大切なや
つなんや！

簡単にお前にひよいひよい渡すかボ・・・」

え？

平次？

何それ・・・冗談やよね？

当たり前やん。

ねえ・・・

平次も風上さんも、目を見開いてこっちを見ていた。

「かつ和葉・・・。」

「・・・。」

風が吹く。

真っ先に口をあけたのは平次だった。

「えーっと・・・和葉、あっあのなあ。さっきのはその・・・幼なじみとしてっちゅうことであって・・・。」

もちろん、そんなんわかってるわ。

平次が私を幼なじみとしてしか見てないなんて分かってる。

でもな・・・

アタシは平次が一番・・・好きって想える自信はあるんや。

「ちよつと平次待つて・・・あたし、風上さんに言わなきゃあかんことがあるんや。
ちよつと下で待つててもらえる？」

平次を見つめる。

平次の目が一瞬横にずれ、風上さんのほうを見た気がした。

もう一度アタシの方を見て、呟いた。

「分かった。」

ドアを開き、平次が出て行く。

2人だけの世界。

雲がわずかに動いた。

一歩前進してみた。

「風上さん・・・」

風の音が聞こえる。

もう迷う必要などない。

自分の気持ちを口にするだけ。

FILE・16きつと言えるから（後書き）

どうも桜草です！

新年になりますねー！おめでたいです！

風邪はだいぶ治ってきました！良かったです。

お正月も特に用事がないので、連載は続けていきます。

最終話に近づいてきましたが・・・この話が終わっても第2部らし

きものとして、「平次×和葉」をやるうかと思っております！

詳しいことはまた次で・・・（笑）

では

FILE・17 一途の想い

「風上さん・・・今までごまかしてごめん・・・。アタシの本当の気持ち・・・伝えるわ。」

「へー。じゃあ聞かせてくれる？告白の応え・・・。」

和葉は息を吸い込む。

心臓の音、目の前にいる風上の目線。

全てを受け止めながら。

ごまかしていた事を今、伝える。

「アタシは・・・ずっとごまかしてた。自分の気持ちを・・・。」

「・・・。」

「アタシは・・・平次のことが好き。」

目は逃げない。

和葉は相手の眼を、そのまま見つめる。

「ずっと好きだったんや・・・だから、風上さんごめ・・・。」

「ただの幼なじみじゃなかったのか？」

遮られる。和葉は少しひるんだ。

幼なじみ？

ううん、今は違うやろ・・・アタシにとって。

好き。

平次のが好き。

でも平次にとってアタシは・・・

「確かに平次にとってはアタシは、ただの幼なじみかもしれない・・・でもアタシは平次が好き。それだけや。」

「それだけで片付けられる問題じゃないだろ？僕は・・・君のことが・・・」

「ごめん・・・風上さん。アタシは平次しか見られへん。」

風が流れる。

春とは思えない、冷たさだった。

言葉を続ける。

「もしかしたら・・・この恋は叶えられへんかもしれない・・・ず

つと幼なじみかもしれない・・・けど・・・！平次が好き。アタシはあきらめへん。」

唐突かもしれないけど、今の自分の本当の気持ちはそれだけだった。好き。

告白したっていい返事が返ってくるかなんて、分からない。

もしかしたら、あの鈍感男はNOと言うかもしれない。

それでもやっぱり好き。

平次が好き。

あきらめるわけないやん・・・。

「・・・しょうがないか」

「え？」

「・・・前に君みたいな子を好きになったんだ・・・気は強いんだけど、根が優しく彼氏の帰りを待っている子。

告白したけどだめだった・・・ほんと、一途でどうしようもなかったなあ。」

「風上さん・・・。」

遠くかなたの空を、悲しい瞳で・・・風上は眺めていた。

まるで、遠い過去を追うように。

そうか・・・この人も同じなんやな・・・。

一途だった。それは同じだ。

一途に自分だけを見ていた。

ありがたかった。

いい人だと、思えた。

「ありがとう。少しだけだったけど、アタシのこと・・・好きにな
ってくれて。」

「こちらこそ・・・じゃあ。」

一步一步確かめるように、風上は歩いていく。
ドアの前で振り返り、また前を向いた。

たった今話していた相手がいなくなった。

空を見る。夕焼けの空だった。

屋上のドアを開けた。走る。

平次のもとへ。

FILE・17 一途の想い（後書き）

どうも桜草です！

更新遅れて、本当にすみません！！

2、3日前に風邪で、動けませんでした（泣
ようやく治ってきたので、頑張ります！

最終回間近ですね・・・！

どうなるのかは、ぜひ期待してください。

第2部（？）の方のストーリーはまだ秘密。

キャラとしては、平次の宿敵（？）そうな人が出てきます。

平次×和葉の第2部と同時に、新一×志保もやろつかと思っています！
す！

そちらの方も、ぜひよろしくお願いします！

FILE・18あの時の夕陽

靴箱の前で、平次はまっていた。

和葉が階段を下りてやってくると、横を向いて聞いた。

「どないした？風上との話は終わったんか？」

「うつうん……。もう、何もあらへんよ……。アタシ、風上さんの告白断ったから。」

「そうか……。そらー良かったやん。」

しばし沈黙が流れる。

平次の表情は無表情で、何を考えているか見当がつかなかった。

ふいに天井を向くと、つぶやく。

「和葉……。バイク、久しぶりに後ろ乗るか？」

「へっ？何で、いきなりそんなこと……。ま、まあええけど振り落とされんよう気をつけるわ。」

「アホ！俺のバイクテクニクは一流や！」

会話を交わし、校門前に止めてあったバイクに乗る。

和葉は後ろに乗り、平次にしがみついた。

・・・。

「アッアホ！！そんなに引っ付くなや！」

「へっ平次のバイクテクニクは信用できんからなあ・・・一応つかまをつくわ！」

二人して顔を真っ赤にしながら、もう暗くなりつつある大阪の道路を走った。

平次のバイクは、大阪のはずれまで来て一つの山中に入った。

「？平次・・・どこ行くつもりなん？」

「・・・まだ秘密や。」

だいぶ奥まで入っていった。

はつきり言ってもものすごく暗くて不気味・・・。
和葉はそう感じた。

森の音がざわめいている。

「。

「おい！起きろや！たく・・・いつまで寝てるつもりやアホ・・・」

「へ？」

どうやら眠ってしまったらしい。

目を開けてみると、赤い景色が広がってきた。

・・・え？

夕陽・・・。

真っ赤に光る太陽は、以前見たことがあるきがした。
そう、これは・・・

「7歳くらいやったかなあ・・・俺が手錠でいたずらして、オトンに怒られるのを恐がって
一緒にここにきたやんか・・・忘れてしもたんか？」

「わっ忘れるわけないやん！あん時も綺麗やったなあ・・・昔と変

わらへんわ・・・。」

幼いあのとき・・・一緒に見た夕陽は、いつまでもキラキラと輝いている・・・。

アタシ・・・あん時から平次のこと・・・

平次の方をしてみる。

夕陽をずっと眺めていた。

何、考えているん？

そう思ったとき・・・

「和葉・・・」

急にこちらを向かれ、少しびつくりした。

「なっなに？」

「ちょっと話がある・・・聞いてくれへんか？」

「・・・うっうん・・・。」

まだまだ夕陽は輝いていた。

FILE・18あの時の夕陽（後書き）

どうも桜草です！

こっ更新遅れて本当にすみません！

大丈夫です、風邪も治ってきましたから・・・。
これからはペースが早くなるかと思っています。

と言っても・・・あと4話程度かと・・・
最終回に向けて、ラストスパートです！
応援よろしくお願いしますw

FILE・19 好きや

夕陽が真っ赤に燃え盛る。

自分と和葉を、熱く照らしていた。

和葉が息を詰めていることが分かる。

聞きたいのだ。

平次が何を考えているのか。

一息ついて、話し始めた。

「和葉・・・俺ら、ずっと幼なじみやったやないか・・・一緒に遊んだり・・・喧嘩しとったり・・・。」

最近お前おかしいのと違うか？俺を避けてるみたいで・・・。」

「そっそんなんちゃうよ！」

「そんなことある・・・。おもいつきし俺を避けとるわ・・・。それとも何や？好きな人に誤解される言^ゆって避けてるんか？」

和葉が下唇を噛み、黙り込んだ。

目はいかにも辛そうに開いている。

怒らせてしもうたな・・・ま、どーせ・・・俺のことは・・・

無意識に笑っていた。

自分自身が、とても弱くて・・・。

「何言ってるの？・・・私だって好きで避けとるわけやない・・・
幼なじみともう卒業したかったから・・・」

「は？何で？」

「え・・・いやそれは・・・。」

幼なじみから平次のことを好きということに、完全に切り替えたかったから。

和葉は頭の片すみでそう思った。

平次のが好き。

幼なじみなんて、関係ない。

平次が好き。

ただそれだけでいい。

「ま、ええわ。少なくとも俺はほんの少しだけ・・・寂しかった
わ。

初恋の人とか・・・好きな人とか・・・そんなん関係ないんとちゃうか？

幼なじみなんて、和葉との関係だけに過ぎん・・・お前はそうとし

か思つてへんかもしれんけど・・・。」

「・・・けど？平次と私はただの幼なじみ。今は・・・今はまだ、それでええんちゃ・・・。」

「いいから黙つて聞いてくれや！」

二人は、息を詰めて黙り込む。

ふつと息をつき、平次は前を見た。

心臓の鼓動が激しくなる。

自分の心から、ある感情があふれ出てきた。

目が熱くなる。

言葉として今、伝える。

「お前は・・・俺のことを厄介モンとして嫌つとるかもしれん・・・でも・・・でも俺は・・・。」

「・・・！」

「この世で一番・・・和葉のことが好きや」

FILE・20 こんなにも

『この世で一番・・・和葉のことが好きや。』

え？

平次・・・嘘ちゃうよね？

確かに今、アタシのことが好きやって言っただけ・・・。
夢とちゃう・・・わ。

好き・・・

アタシの事を・・・。

嬉しいのか、びっくりしているのか自分の体が動かない。
顔が真っ赤になっているのが、自分でも分かった。
もちろん・・・平次の顔も・・・

好きと伝えてくれた。
嬉しかった。

それだけの気持ちでもない。

返事・・・返さなきゃ・・・。

「返事は言わんでええから・・・。」

「え？」

返事は・・・言わなくていい？

どっどっいうことなん？

平次・・・？

「返事は言わんでええから・・・ただこの気持ちを伝えとっただけや
ったから・・・。」

なんで。

なんでそないなことを言うん？

本当に・・・本気で返事聞きとっないん？

嫌われていると思ってるから？

アホやん・・・。

平次はもうすでに、立って帰ろうとしていた。
夕陽が強すぎて表情までは、分からなかった。

平次・・・平次ってそんな弱い人間だったん？
逃げるなんて卑怯やない・・・

「平次！！」

「え？」

「ふざけんといて！返事は聞かなくていい？ここまで連れてきてい
て何言うてんねん！」

「・・・和葉・・・。」

一歩相手に近づく。

鼓動が高まる。

弾ける気持ちでいっぱいだった。

平次・・・嘘ちゃうよ・・・アタシはこんなに平次の事・・・。

「アタシも・・・平次のこと誰よりも好きや！！」

ドクン・・・ドクン・・・

胸の鼓動がキコエル・・・。

そう、アタシはこんなにも平次のことを好き――。

FILE・20 こんなにも（後書き）

どうも桜草です！

わー！！更新遅れて本当にごめんなさい！

学校での行事に追われていて・・・。

しかも今回、めっちゃ文が少ないですね・・・。

えー次回で最終回です。（一応）

あ、でも最終回と言ってもエピソードとあとがきもありますので！
見捨てずに最後まで読んでいただけると幸いです。

よろしく願います。

最終話／エピソード

・・・

「ホンマか？嘘とちゃうよな？」

頷く。

大好きだもん。

ホンマに・・・ホンマに・・・大好きや。

「本当やもん・・・こんなアホやのに・・・平次のことが好きや・・・」

「なんやアホやのにつて！どーゆう意味や！アホ！！」

「アッアホアホ言つなやボケ！！」

本当は、平静なんか装えない。
好き・・・

好意だけでは表せない気持ち・・・

大切なもの・・・

本当に・・・大切な・・・

「ありがとう。」

「・・・ああ。」

自然と平次の胸にゆく。

ずっと、ずっと抱き合った。

二人はずっと・・・繋がっている。

これが証――。

大好きやから・・・。

『エピソード』

「和葉！遅いわ、先学校いつとるぞ！」

「ちょ、ちよっと待って！」

もう、朝っぱらから騒がしいわー！

あの告白から1週間。

他の人から見ると・・・何も変わってへんかもしれへんね。

でもな。

やっぱり変わったわ。

お互いのことが好きだってわかった今、ホンマに変わった。

平次の愛を感じる――。

・・・いやいや！

そんな『LOVE LOVE』なんて、通天閣よりもゴジラよりも・
・

うつん、宇宙の果てとかよりも果てしなく遠いかもしれへんね。
工藤君や蘭ちゃん達と違うんやし・・・。

でも、今はまだそれだけでもええから。

本当に好きなんだから、それでいいわ。

平次も・・・アタシも・・・お互い好きなんやから。

信じているから・・・愛しているから・・・

大好きだから――。

「和葉！ホンマにホンマに先言ってしまうぞー！」

「待つてな平次！今行くわ！」

慌てて平次の前へ向かう。

太陽が輝き、照らしていた。

「平次、大好きやで。」

「なっ！何やねんいきなり！」

「はあ？ホンマのこと言うてんやん！平次も言ってな！」

「そ．．．そんな恥ずいこと、言えるわけないわボケ！」

——．．．大好きやから——

空を仰ぐ。

雲ひとつのない、美しい空だった。

「わあ．．．綺麗な空やわあ！」

「ホンマや．．．この時期に珍しいなあ。」

空が青く、流れていった

いつまでも、ハイテンションで・・・

あとがき

読者の皆さん、作者の桜草です。

最後はどうしても、文で終わらせたかったのでこの場を使って挨拶させていただきます！

皆さん・・・最後まで読んでくださって本当にありがとうございました！

話を作っていて、書いているのに展開が読めなくなったり・・・
なんで文章が下手な私が・・・小説を書いているのだろうとブルー
になったりもしました。

でも読者の方々の感想や言葉を力に、頑張って来れました！

本当にありがとうございました！

お名前をお借りして、感謝の意を表したいと思います。

関西弁のセリフのアドバイスを下さった*ココロン*先生、
個人的なアドバイスまで気を配ってくださった、魔法戦隊三輪野助
先生、

厳しい意見を書いていただいた、朔様、

関西弁を訂正していただいた、ヴァレン様、
褒めちぎってくださいった愛花様、

文章の細かい点までアドバイスを頂いた、BETWEEN様、

作者の苦手としていた展開を褒めてくださった、風の日様、
続きを・・・と励ましてくださった、奈実様、

大阪二人組が好きと同意していただいた、さくら様、

人物の細かい心情まで理解してくださった、AKKO様、

脱字や誤字の点を注意してくださった、奈津美先生、

作者は神と・・・もったいないお言葉をくださった、A・H様、
もっと早く更新を！と作者を励ましていただいた、彩ちゃん様、

そして連載当初から・・・ずっと更新されることに感想を下さり
励ましていただいたH・F様！

皆さん、本当にありがとうございました！

（本気で泣きました！）

絶対にコメントがなかったら、STOPしていたと・・・。
本当に間違いなく！

支え、励ましていただき・・・ありがとうございました！

● 作品について ●

私は、作者登録をしてからすぐにこの小説を連載しはじめました。
話の構成も立てずに一気に。

ですから中編にはいつて『あれ？ここどうすればいいのかな？』
なんてアホな事を考えてみたりもしました。（汗）

ものすごく苦労した結果がこれですから・・・
駄作ですが、作者自身は達成感でいっぱいです！

これからも小説を書いていきますのでよろしくお願いします！

●これからの作品について●

この作品のあと、すぐに第2部らしきものをやろうと思いましたが・
・・・

2月14日。

そう、バレンタインの話をやろうと思っているんです！

ですから・・・大阪LOVEテンションの続編は、その後という形
になります！

本当にごめんなさい！

また、それと同時に・・・コナン×哀の長編も書いていきたいと思
っています。

そちらの方も応援よろしくお願いします！

●最後に●

この話の続きはあります！
まだ終わってはいない。

これからも続けていきます。

応援、よろしくお願いします！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9693c/>

大阪・LOVEテンション

2010年10月20日13時59分発行